1994.10
第20号

博物館だより

大津市歴史博物館

芭蕉翁絵詞伝（部分、大津市指定文化財・義仲寺蔵）

芭蕉と近江の門人たち展を開催

10月8日（土）～11月13日（日）

元禄七年（一六九四）、俳聖と仰がれた松尾芭蕉が大坂で没してから今年はちょうど三〇〇年目にあたります。これを記念して、大津市歴史博物館では、十月八日（土）から十一月十三日（日）まで、企画展「芭蕉と近江の門人たち」を開催します。

芭蕉は、琵琶湖と緑の山々に抱かれた近江の風光をこよなく愛し、この地の門人たちと心温まる交流を重ねました。「行く春や近江の人と惜しみける」の句はそういった芭蕉の心情を端的に表現したものですし、芭蕉は、義仲寺に葬ってくれるようにと遺言もしています。また近江、とりわけ湖南の門人には「あなたの住む土地を、私は旧里（ふるさと）のように思っています」とまで手紙に書いているのです。まさに近江は、芭蕉の心の故郷だったと言っても過言ではないでしょう。

本展では、近江を思う芭蕉の心、近江の門人たちとの交流の軌跡などを、重要文化財三件を含む約九〇点の作品によって紹介します。芭蕉の画像や木像、芭蕉の生涯を描いた絵巻物、芭蕉の直筆書簡、発句短冊や懐紙、近江の門人たちの描いた俳画など。

なかでも芭蕉の生涯を三巻の長大な絵巻物に仕立てた『芭蕉翁絵詞伝』（大津市・義仲寺蔵）、与謝蕪村の描いた『芭蕉画像』（京都市・金福寺蔵）、その他本来ワンセットで、現在離れ離れに所蔵されている重要文化財の『奥の細道図屏風』（山形美術館蔵）と『野ざらし紀行図屏風』（個人蔵）（ともに与謝蕪村筆）、およびそれら二点の屏風にゆかりの深い俳人色紙短冊貼交屏風を揃えて展示。また、「奥の細道」と並ぶ芭蕉の名作として知られる「幻住庵記」の推敲過程を物語る去来宛芭蕉書簡（個人蔵）など、ふだんはあまり公開されない貴重な作品も数多く展示いたします。

企画展の内容

企画展で展示する主な作品は、次のとおりです。皆さんの御来場を、お待ちしております。

① **芭蕉翁絵詞伝**　三巻（大津市・義仲寺蔵、市指定文化財）

芭蕉の生涯を、絵と文章で綴った絵巻。三巻あり、一巻が一一～一七メートルもある長大なもの。芭蕉百回忌を翌年に控えた寛政四年（一七九二）に完成した。絵は狩野正栄至信。詞書は芭蕉の顕彰に努力した蝶夢が自ら起草、執筆した。深川の芭蕉庵、野ざらし紀行、奥の細道から芭蕉終焉前後のありさまなどが、色鮮やかな絵と格調高い文章によって綴られています。なお本作品は、約二〇年ぶりの公開となります（会期中三巻を随時展示替え）。

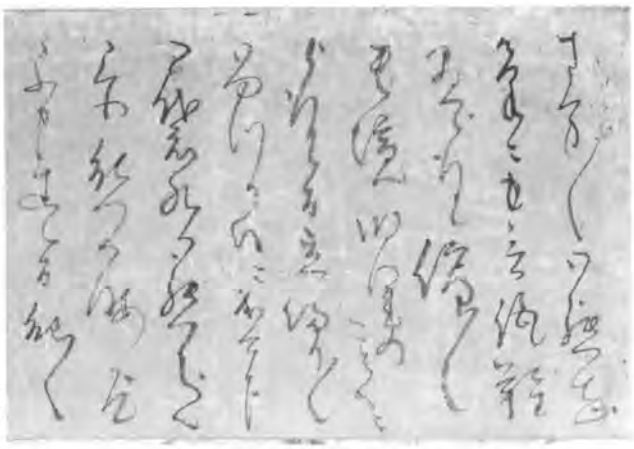
② **許六刀芭蕉像**　城陽市・常光庵蔵

芭蕉の木像も数多く残っていますが、これだけ近江に縁の深い伝承をもつ像は他にありません。というのも、彦根の蕉門森川許六が、大津の蕉門智月に頼まれて彫ったといわれる木像だからで、もと京都市東山区の芭蕉堂の本尊として安置されていました。粗削りな造りで、正面からと側面からでは、芭蕉の表情が穏やかに見えたり、厳しく見えたりし、実に味わい深い木像といえます（但し展示は十月二十五日まで）。

許六刀芭蕉像（城陽市・常光庵蔵）

③ **正秀宛芭蕉書簡**　元禄三年九月二十八日付（個人蔵）

本書簡は、大津の蕉門たちの短冊や懐紙とともに二曲一隻の屏風に貼り交ぜられています。正秀は膳所の蕉門。芭蕉は、元禄三年四月から七月まで国分の幻住庵に滞在しますが、この書簡はその後膳所を立ち去るにあたって認めたもの。書簡には「あなたの住む土地を私は旧里のように思っています。何度もお邪魔し御厄介になりたいと存じます」とあり、近江、とくに湖南の地に熱い思いを寄せる芭蕉の心情がよく伺えます。



正秀宛芭蕉書簡（個人蔵）

④ **破笠筆芭蕉像**　一幅（出光美術館蔵）

芭蕉を描いた画像はたくさんありますが、生前の芭蕉を知る者によって描かれた芭蕉像は少なく、貴重な資料となっています。本画像は、芭蕉の門人小川破笠によって描かれたもので、数珠をもって端座する芭蕉

杉風筆芭蕉脇息図（天理大学附属天理図書館蔵）

の顔は、穏やかななかに厳しさの漂う風格あるものとなっています。その他、同じく蕉門の杉山杉風の描く芭蕉脇息図、森川許六の奥の細道行脚図（いずれも天理大学附属天理図書館蔵、但し許六筆は複製）も本展で展示いたします。俳聖芭蕉の面影を、これらの画像によって偲んでいただければと思います（いずれも展示は二週間）。

⑤ **蕪村筆奥の細道図屏風**　山形美術館蔵　六曲一隻
蕪村筆野ざらし紀行図屏風　個人蔵　六曲一隻
（ともに重要文化財）

江戸時代後期の画家で俳人でもある与謝蕪村は、芭蕉を慕い、芭蕉に関する多くの絵画を残しています。今回展示する屏風は、蕪村が「奥の細道」と「野ざらし紀行」の全文を書き写し、それに絵を添えたもの。これら二点の屏風は、江戸時代には一双屏風として所蔵されていたもので、現在は離れ離れに保管されています。本展では、これらの屏風がもと一双仕立ててあったことを示す俳人色紙短冊貼交屏風（山形美術館蔵）とともに展示、もとの姿として一堂に会するのは五〇年振りのことです（但し展示期間は十月二十八日から十一月十三日まで）。

なお会期中、当館講堂において展覧会に関係した記念講演会を行います。講演会は、十月二十九日（土）午後一時半から三時まで。講師は大谷大学名誉教授・山本唯一先生で「京・近江の蕉門たち」と題し、お話しいただきます。またオープン当日の十月八日及び会期中の毎週水曜日には本館学芸員による展示解説（ギャラリートーク、いずれも午後二時から）を行いますので御参加ください。なお記念講演会については、事前に申込みが必要です。

収蔵品紹介 ⑲

坂本城出土軒丸瓦・軒平瓦

一六世紀後半

坂本城は、滋賀県大津市下阪本三丁目（旧字城畦）付近に所在し、京阪電鉄石坂線松ノ馬場駅の東方約七〇〇mの琵琶湖畔に位置する。当該地の地形は比叡山東麓に源を発する東南寺川が琵琶湖へ流入する河口付近の三角州地帯にあたっている。

坂本城の歴史的経緯は、元亀二年（一五七一）九月、比叡山延暦寺（山門）焼き打ちのあと、織田信長が宇佐山城の守将明智光秀に滋賀郡を支配させることを命じて、坂本浜に城を構築させた。この城は焼き打ち後、比叡山延暦寺の監視と堅田地域等北方に存在する豪族を抑え、琵琶湖の制海権を手中にすることを目的として築かせたのである。

この城跡の本格調査は、昭和五十四年に大津市教育委員会で実施され、石組の溝状遺構、石組井戸、石組池、暗渠、石垣の基礎石列、礎石建物、堀立柱建物、湖中石垣などが検出され、莫大な量の瓦類のほか、漆器、銭貨、青銅製品、鉄製品、石製品、陶磁器、土師器などの遺物が出土した。

今回紹介する瓦類は、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鬼瓦、鳥衾瓦がみられるが、とりわけ軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦はいずれも青黒色や灰黒色のもの（A種）と赤い発色になるもの（B種）の二種類があり、この特徴は安土城出土瓦と共通するようである。また、軒丸瓦には、天正三年（一五七五）、佐々成政が築城した越前小丸城（福井県武生市所在）や元亀二年（一五七一）、細川藤孝による大改修が行われた山城勝竜寺城（京都府長岡京市所在）と同笵かと思われるものもある。軒丸瓦・軒平瓦は、瓦当面の文様形態からつぎのように分類できる。軒丸瓦は、巴文と宝珠文の大きく二種類に、さらに巴文には左巻三種、右巻四種の合計七種類がある。軒平瓦は、唐草文を有するもの十三種、波に宝珠のもの一種の合計十四種類が確認される。鬼瓦には、上方に火炎宝珠、下方に波に宝珠の軒平瓦と同じ文様をもつものが認められた。以上、これらの瓦類は、いずれの建物に使用されたかは不詳であるが、周辺の調査地点では瓦類が少量しか出土しないだけにこの地点の瓦葺建物は、坂本城の構造を解明するうえで極めて重要な意義をもっているといえよう。

（吉水眞彦）

「横山大観・菱田春草展」閉幕

平成六年八月三日(水)から九月十一日(日)まで京都新聞社との共催で開催しました「横山大観・菱田春草展」は、好評のうちに終了しました。

本展は、岡倉天心の愛弟子で、日本画の近代化に取り組み、数々の名作を残した、横山大観・菱田春草両画伯の、名品一三六点を集めて、その画業を回顧しようとしたものです。

展示構成は、初期・東京美術学校時代、日本美術院の結成と五浦結集の時代、初期文展時代、大観の日本美術院再興時代、大観の昭和前期、戦後の大観・晩期の六コーナーに分けて、両画伯の作品を年代順に展示し、その作風の展開をたどってみました。

会期は三五日間でしたが、滋賀県内はもちろん京都・大阪から大観・春草の芸術に関心をもつ多数の方々が来館され、総観覧者数は一九、〇二一人にのぼりました。

なお、八月二十一日には、本展を監修された、原田平作大阪大学教授を迎えて、講演会「大観と春草の作風」を開催。聴講者は九七人でした。

博物館日記抄

平成6年7月2日
平成6年9月27日

7月2日 ふるさと大津歴史教室「葛川渓谷に文化財を訪ねて」開催、定員の倍以上の申込あり。京都工芸繊維大学建築科学生18名来館

3日 館内会議開く。

5日 濱田隆山梨県立美術館館長・守屋正彦同館学芸課長、東京都各市議会事務局長29名、建設省都市局一行来館

7日 第45回大津市美術展覧会開催される、佐々木進氏(栗東歴史民俗博物館)来館

8日 親子歴史講座「縄文土器と古代の楽器をつくろう」(8月20日・30日も講師奈良俊哉県文化財保護協会技師ら)

9日 坂本登文部省社会教育官来館

12日 第89回土曜講座「昭和初期の大津」(寄贈をうけ編集した16ミリフィルムの上映と解説 講師樋爪修当館学芸員)

15日 館内定期燻蒸(25日までの五日間)

21日 桑山俊道氏(県立近代美術館)、井野泰雄氏(雲住寺)、仏教大学通信学部学生(第一回)各来館

27日 ドイツのヴュルツヴルク市訪問団38人来館

28日 第10回企画展「横山大観・菱田春草」の開場式およびレセプションを開く。

8月2日 企画展一般公開、今回からギャラリートークをはじめる

3日 「大津夏まつり」に歴博から出店する

7日 午前10時すぎ開館以来観覧者数40万人目を迎える、西田芳子さん(大津市際川三丁目)に山田豊三郎大津市長から花束と記念品を贈呈

10日 山中健氏(神戸市立博物館)来館

11日 企画展記念講演会「大観と春草の作風」(講師原田平作大阪大学教授)開く

21日 博物館実習はじまる(七大学の学生、26日まで)、西川幸治氏(京都大学名誉教授)来館

23日 林屋辰三郎当館顧問・井筒興兵衛成安造形大学学長来館、博物館収蔵品収集審査会開く

25日 橋本太郎氏(大石小学校)、西村王允氏(中主小学校)来館

26日 第90回土曜講座「仏像観賞のすすめI」(講師岩田茂樹当館学芸員)

27日 館内会議開く

9月1日 第91回土曜講座「仏像観賞のすすめII」(講師前回と同じ)

3日 親子歴史講座「古代瓦の拓本をとろう」(講師松浦俊和当館学芸員)、安岡瑞穂県観光物産課長・野坂尚宏同課専門員、西川丈雄長浜市史編さん担当補佐来館

10日 企画展閉幕、観覧者数一万九、〇二一人を数える

11日 名古屋市中京テレビ放送取材

15日 第92回土曜講座「古代近江人物誌I」(講師松浦俊和学芸員)、群馬県立歴史博物館友の会来館

17日 沙加戸弘大谷大学助教授来館、大津市写真展開かれる(25日まで)

20日 小西晴弥氏(平野学区自治連)、井上太刀夫氏(膳所高等学校)来館

21日 佐藤康宏氏(文化庁美術工芸課技官)来館

27日

博物館だより 第20号
発行日 平成六年十月七日
編集 大津市歴史博物館
発行所 大津市御陵町二―二
大津市歴史博物館
電話(〇七七五)二二―二二〇〇代